

【優秀賞】

タイトル：役割分担

生徒氏名：山田菜月

吹奏楽部の私は、夏の忙しい時期になると毎日、帰宅時間は午後七時近くになってしまいます。帰り道、友だちと曲がり角で別れ、その次の曲がり角を曲がると、見えてくる私の家。私は、家の窓から光が漏れていると安心します。温かな光は、家に誰かがいる証拠です。

「ただいま」とドアを開けると、父がキッチンに立っていました。両親が共に公務員の私の家では、よく見る光景です。父がどんなに遅く帰ってくる日も、母は夕飯を作って待っているし、母が忙しい時期は、父と私が分担したりして、家族全員分の夕飯を作ります。それが、私の家では普通です。私は、なにも不満はありません。父も、なにも言わず大抵の家事をこなします。

そもそも、私の父は、幼いころに自分の父を病気で亡くし、妹、母、祖母、の女性ばかりに囲まれて育ちました。父曰く、だから家事はなんでもできるらしいのですが、私は、家事ができる男性なんて、今の時代、いくらでもいると思うのです。

父は、私が小学生のころは、よく授業参観に来てくれていました。教室がきれいなお母さん方で埋まる中、父親は私の父一人、ということも少なくなかったです。ですから、いつも私の父は注目の的で、クラスメイトは、たまに授業参観でひとりだけいる父親が、誰の親か、すぐに覚えました。そして私はときどき、母親の存在を疑われました。「なっちゃんのお母さん、見たことない。」と、友だちに言われる度、私は、どのように答えてあげればいいのか分かりませんでした。なぜなら、私にはお母さんもお父さんもいます。両親はお互いの仕事の忙しさを考慮して、それでも、私の授業参観には毎回どちらかが絶対来てくれていたので、父も母も、同じくらいの割合で授業参観に来ていました。今思えば単純なことだけれど、私は、クラスメイトの父親は、なぜ来ないのだろうと思いました。友だちのお父さんの存在を疑いました。確かに、きれいなお母さん方の中で、私の父は目立っていたかもしれない。きっと、クラスメイト達は、家に帰れば、毎日、お母さんが夕飯を作って待っていてくれるのでしょう。けれど私は、父であろうと、母であろうと、仕事が忙しい中、私の授業を見に来てくれることが嬉しかったのです。

そのことを、帰宅してから父に話しました。すると父は、「しょうがないよ。」と笑って、保護者会などであったことを、私にきかせてくれました。

た。私と父の会話を横で聴いていた母は、それから、授業参観のお知らせのプリントを私がもってくる度、私に、父と母のどちらに来てほしいかたずねるようになりました。そのとき私は、どちらでもよかったのですが、前回は父だったこともあったので、母が来てくれることを希望しました。するとそれから、父が授業参観に来ることは、減っていきました。

現代社会では、男女差別は消えません。私も、男性には男性の役割、女性には女性の役割があると考えます。ただ漠然と、「差別」という言葉で表記して、片付く問題ではないと思います。それぞれの役割があることを理解した上で、生活してこそ、「差別」という言葉は、意味を失っていくのだと、私は思うのです。

一家を養うために、誰よりも働いた私の祖母。その祖母を母に持ち、幼いころからその姿を見ていた父。母親と仕事を両立している母。父は、まだ男女差別が当たり前だったころの、女性の強さを知っています。そんな両親の姿を見て、私は、たとえ、男女差がなくなっても、男女が共に持つ可能性を、他人が摘み取ってはならないことを、知りました。

私の部活生活を、両親はとても温かく支えてくれました。中学校生活最後のコンクールは祖母を含め、家族全員で聴きに来てくれました。

私にとって両親は、誰がなんと言おうと、大好きな両親です。男女の役割について考える、よき教師でもあります。いつも私のことを大切に考えてくれる両親のおかげで、私は楽しく学校生活を送れているし、高い目標と、大きな夢を持つことができました。

両親のような、深く広い考えを持った大人に私もなりたいです。